

台川

宮沢賢治

青空文庫

「もうでかけませう。」たしかに光がうごいてみんな立ちあがる、腰をおろしたみじかい草、かげろふか何かゆれてゐる、かげろふぢやない、網膜が感じただけのその光だ、

「さあでかけませう。行きたい人だけ。」まだ来ないものは仕方ない。さつきからもう二十分も待ったんだ。もつともこのみちばたの青いいろの寄宿舎はゆつくりして爽さはやかでよかつたが。

これから又こゝへ一返帰つて十一時には向ふの宿へつかなければいけないんだ。「何処さ行くのす。」さうだ、釜淵かまぶちまで行くといふの知らないものもあるんだな。「釜淵かまぶちまで、一寸ちよつと三十分ばかり。」

おとなしい新らしい白、緑の中だから、そして外光の中だから大へんいゝんだ。天竺木綿てんぢくもめん、その菓子こしの包みは置いて行つてもいゝ。雑囊ざつなうや何かもこゝの芝へおろして置いていゝ行かないものもあるだらうから。

「私はこゝで待つてますから。」校長だ。校長は肥ふとつてまつ黒にいで立ちたしかにゆつくりみちばたの草、林の前に足を開いて投げ出してゐる。

「はあ、では一寸行つて参ります。」木の青、木の青、空の雲は今日も甘酸っぱく、足なみのゆれと光の波。足なみのゆれと光の波。

粘土のみちだ。乾いてゐる。黄色だ。みち。粘土。

小松と林。林の明暗いろいろの緑。それに生徒はみんな新鮮だ。そしてさうだ、向ふの崖がけの黒いのはあれだ、明らかにあの黒曜石の dyke だ。こゝからこんなにはつきり見えるとは思はなかつたぞ。

よしうまい。

「向ふの崖をごろんなさい。黒くて少し浮き出した柱のやうな岩があるでせう。あれは水成岩の割れ目に押し込んで来た火山岩です。黒曜石です。」ダイクと云はうかな。いゝや岩脈がいゝ。

「あゝいふのを岩脈といひます。」わかつたかな。

「わかりましたか。向ふの崖に黒い岩が縦に突き出てゐるでせう。あれは水成岩のなかにふき出した火成岩ですよ。岩脈ですよ。」

あれは。」

ゆれてるゆれてる。光の網。

「この山は流紋凝灰岩でできてゐます。石英粗面岩の凝灰岩、大へん地味が悪いのです。赤松とちひさな雑木しか生えてゐないでせう。ところがそのへん、麓ふもとの緩い傾斜のところには青い立派なくわつえふ闊葉樹が一杯生えてゐるでせう。あすこは古い沖積扇です。運ばれて来たのです。割合肥沃ひよくな土壤を作つてゐます。木の生えぐあひ工合がちがつて見えませう。わかりませう。」わかるだらうさ。けれどもみんな黙つて歩いてゐる。これがいつでもかうなんだ。さびしいんだ。けれども何でもないんだ。

後ろで誰かこぶんで石ころを拾ってゐるものもある。小松ばやしだ。混んでゐる。このみちはずうつと上流まで通つてゐるんだ。造林のときは苗や何かを一杯つけた馬がぞろぞろこゝを行くんだぞ。

「志戸平しどたひらのちかく豊沢川の南の方に杉のよくついた奇麗な山があるでせう。あすことこゝとはとても木の生え工合や較くらべにも何にもならないでせう。向ふは安山岩の集塊岩、こっちは流紋凝灰岩です。石灰や加里や植物養料がずうつと少いのです。ここにはとても杉なんか育たないのです。うしろでふんふんうなづいてゐるのは藤原清作だ。あいつは太田おほただからよくわかつてゐるのだ。

「尤も向ふの杉のついてゐるところは北側でこっちは南と東です。その関係もありますがさうでなくてもこっちは北側でも杉やひのきは生えませんが。あすこの崖がけで見てもわかります。この山と地質は同じです。たゞ北側なため雑木が少しはよく育つてます。」「いや駄目だめだ。おしまひのことを云つたのは結局混雑させただけだ。云はないで置けばよかつた。それでもあの崖はほんたうの嫩わかい緑や、灰いろの芽や、樺かばの木の青やずるぶん立派だ。佐藤さとう箴かんがとなりなりに並んで歩いてるな。桜羽場さくらばが又凝灰岩を拾つたな。頬ほがまつ赤で髪あかも赭あかいその小さな子供。

雲がきれて陽が照るしもう雨は大丈夫だ。さつきも一遍云つたのだがもう一度あの禿はげの所の平べったい松を説明しようかな。平

つたくて黒い。影も落ちてゐる、どこかであんなコロタイプを見た。及川おひかはやなんか知ってるんだ。よすかな。いゝや。やらう。

「さあ、いゝですか。あすこに大きな黄色の禿げがあるでせう。

あすこの割合上のあたりに松が一本生えてませう。平つたくてまるで潰れた蕈つぶのやうです。どうしてあんなになつたんですか。土壌が浅くて少し根をのばすとすぐ岩石でせう。下へ延びようとしても出来ないでせう。横に広がるだけでせう。ところが根と枝は相関現象で似たやうな形になるんです。枝も根のやうに横にひろがります。桜の木なんか植ゑるとき根を束ねるやうにしてまつすぐに下げて植ゑると土から上の方も箒ほうきのやうに立ちませう。広げれば広がります。」

「そんだ。林学でおら習った。」何と云ったかな。このせいの高い眼めの大きな生徒。

坂になったな。ごろごろ石が落ちてゐる。

「先生この石何て云ふのす。」どうせきまつてる。

「凝灰岩。流紋凝灰岩だ。凝灰岩の温泉の為ために硅けい化くわを受けたのだ。」

光が網になつてゆらゆらする。みんなの足並。小松の密林。

「釜淵かまづちだら俺おら前になんぼがへりも見だ。それでも今日も来た。」

うしろで云つてゐる。あの顔の赤い、そしていつでも少し眼が血走つてどうかすると泣いてゐるやうに見える、あの生徒だ。五ご

ないかは
内川でもないし、何と云ったかな。

けれどもその語はよく分つてゐるぞ。よくわかつてゐるとも。

巨礫きよれきがごろごろしてゐる。一つ欠いて見せるかな。うまくいった。パチンといった。「これは安山岩です。上流かみの方から流れて来たのです。」

すつと歩き出せ。関さんだ。「この石は安山岩であります。上流から流れて来たのです。」まねをしてゐる。堀田だな。堀田は赤い毛糸のジャケットを着てゐるんだ。物を言ふ口付きが覚おぼつか束なくて眼はどこを見てゐるかはつきりしないで黒くてうるんでゐる。今はそれがうしろの横でちらつと光る。

その松林の中から黒い畑が一枚出て来ます。

(あゝ畑も入ります入ります。遊園地には畑もちゃんと入ります) なんて誰だたれったかな、云つてゐた、あてにならない。こんな畑を云ふんだらう。おれのはもつとずっと上流の北きたかみ上川から遠くの東の山地まで見はらせるやうにあの小桜山の下の新らしく墾ひらいた広い畑を云つたんだ。

「全体どごさ行くのだべ。」

「なあに先生さ従ついでさい行けばいゝんだぢや。」又堀田だな。前の通りだ。うしろで黄いろに光つてゐる。みんな躊躇ちうちよしてみちをあけた。おれが一番さきになる。こつちもみちはよく知らないがなあにすぐそこなんだ。路みちから見えたら下りるだけだ。

防火線もずうつとうしろになった。

「あれが小桜山だらう。」けはしい二つの稜りようを持ち、暗くて雲か
 げにゐる。少し名前に合はない。けれどもどこかしんとして春の
 底の樺かばの木の気分はあるけれどもそれは偶然性だ。よくわからな
 い。みちが二つに岐わかれてゐる。この下のみちがきつと釜淵かまづちに行
 くんだ。もうきつと間違ひない。

小松だ。密だ。混んでゐる。それから巨礫がごろごろしてゐる。
 うすぐろくて安山岩だ。地質調査をするときはこんなどこから来
 たかわからないあいまいな岩石ものに鉄槌かなづちを加へてはいけないと教
 へようかな。すぐ眼の前を及川が手拭てぬぐひを首に巻いて黄色の服で
 急いでゐるし、云はうかな。けれどもこれは必要がない。却かへつて
 混雑するだけだ。とにかくひどく坂になった。こんな工合ぐあひで丁度

よく釜淵に下りるんだ。遠くで鳥も鳴いてゐるし。下の方で溪がひどく鳴つてゐる。事によるとこゝらの下が釜淵だ。一寸ちよつとのぞいて見よう。

黒い松の幹とかれくさ。みんなぞろぞろつ従いて来る。溪が見える。水が見える。波や白い泡あわも見える。あゝまだ下だ。ずうつと下だ。釜淵は。ふちの上の滝へ平らになつて水がするする急いで行く。それさへずうつと下なのだ。

この崖がけは急でとても下りられない。下に降りよう。松林だ。みちらしく踏まれたところもある。下りて行かう。藪やぶだ。日陰だ。

山吹の青いえだや何かもぢやくくしてゐる。さきに行くのは大内だ。大内は夏服の上に黄色な実習服を着て結びを腰にさげてずん

ずん藪をこいで行く。よくこいで行く。

急にけはしい段がある。木につかまれ木は光る。雑木は二本雑木が光る。

「ぢや木さば保たご附くこなしだぢやい。」誰たれかがうしろで叫んでゐる。どういふ意味かな。木にとりつくくと弾はね返つてうしろのものを叩たたくといふのだらうか。

光つて木がはねかへる。おれはそんなことをしたかな。いやそれはもうよく気をつけたんだ。藪やぶだ。もぢやもぢやしてゐる。大内はよくあるく。

崖がけだ。滝はすぐそこだし、こゝを下りるより仕方ない。さあ降りよう。大内はよく降りて行く。急だぞ。この木は少し太すぎる。

灰いろだ。急だぞ、草、この木は細いぞ、青いぞあぶないぞ。なかなか急だ。大丈夫だ。この木は切つてあるぞ。「ほう、」そこはあんまり急だ。

おりるのか。仕方ない。木がめまぐるしいぞ。「一人落ちればみんな落ちるぞ。」誰かうしろで叫んでゐる。落ちて来たら全くだ。みんな落ちる。大内がずうつと落ちた。

河原まで行つてやつととまった。

おれはとにかく首尾よく降りた。

少し下へさがり過ぎた。瀑^{たき}まで行くみちはない。

凝灰岩が青じろく崖と波との間に四五寸続いてはゐるけれども

とてもあすこは伝つて行けない。それよりはやっぱり水を渉つて向ふへ行くんだ。向ふの河原は可成かなり広いし滝までずうつと続いてゐる。

けれども脚はやっぱりぬれる。折角ぬらさない為ためにまはり道して上から来たのだ、飛石を一つこさへてやるかな。二つはそのまゝ使へるしもう四つだけころがせばいゝ、まづおれは靴くつをぬがう。ゴム靴によごれた青の靴下か。「一寸ちよつと待つて、今渡るやうにしますから。」

この石は動かせるかな。流紋岩だかなりの比重だ。動くだらう。水の中だし、アルキメデス、水の中だし、動く動く。うまく行つた。波、これも大丈夫だ。大丈夫。引率の教師が飛石をつくるの

もをかしいが又えらい。やっぱりをかしい。ありがたい。うまく行つた。

ひとりが渡る。ぐらぐらする。あぶなく渡る、二人がわたる。

もう一つはどれにするかな、もう四人だけ渡つてゐる。飛石の上そろに両あしを揃へてきちんと立つて四人つゞいて待つてゐるのは面白い。向ふの河原のを動かさう。影のある石だ。

持てるかな。持てる。けれども一番波の強いところだ。恐らく少し小さいぞ。小さい。波が昆布こんぶだ、越して行く。もう一つ持つて来よう。こいつは苔こけでぬるぬるしてゐる。これで二つだ。まだぐらぐらだ。も一つ要る。小さいけれども台にはなる。大丈夫だ。

おれははだしで行かうかな。いゝややっぱり靴ははかう。面倒

くさい靴下はポケットへ押し込め、ポケットがふくれて気持ちがいゝぞ。

素あしにゴム靴でぴちやぴちや水をわたる。これはよつぽどいゝことになつてゐる。前にも一ぺんどこかでこんなことがあつた。

去年の秋だ。腐植質フイウマスの野原のたまり水だったかもしれない。向

ふに黒いみちがある。崖がけの茂みにはひつて行く。これが羽山を越えて台に出るのかもわからない。帰りに登るとしようかな。いゝや。だめだ。曖昧あいまいだしそれにみんなも越えれまい。

「先生、この石何す。」一かけひろつて持つてゐる。「ふん。何だと思ひます。」「何だべな。」「凝灰岩です。こゝらはみんなさうですよ。浮岩質の凝灰岩。」

みんなさつきはあしをぬらすまいとしたんだが日が照るし水はきれいだし自分でも気がつかず川にはひったんだ。

もうずんずん瀑たきをのぼって行く。cascadeだ。こんな広い平ら

な明るい瀑はありがたい。上へ行ったらもつと平らで明るいだらう。けれども壺つぼあな穴の標本を見せるつもりだったが思ったくらりはつきりはしてゐないな。多少失望だ。岩は何といふ円くなめらかに削られたもんだらう。水みづ苔こけも生えてゐる。滑るだらうか。

滑らない。ゴム靴ぐつの底のざりざりの摩擦がはつきり知れる。滑らない。大丈夫だ。さらさら水が落ちてゐる。靴はビチャビチャ云つてゐる。みんないゝ。それにみんなは後からついて来る。

苔がきれいにはえてゐる。実に円く柔らかかに水がこの瀑のどこ

ろを削ったもんだ。この浸蝕の柔らかさ。

もう平らだ。さうだ。いつかもこゝを溯^{のぼ}つて行つた。いゝや、此^{ここ}処ぢやない。けれどもずるぶんよく似てゐるぞ。川の広さも兩岸の崖、ところどころの洲^すの青草。もう平らだ。みんな大分溯つたな。

「こゝをごらんなさい。岩石の裂け目に沿つて赤く色が変わつてゐるでせう。裂け目のないところにも赤い糸^{すぢ}の通つてゐるところがあるでせう。この裂け目を温泉が通つたのです。温泉の作用で岩が赤くなつたのです。こゝがずうつとつちの底だつたときですよ。わかりますか。」

だまつてゐる。波がうごき波が足をたゝく。日光が降る。この

水を渉るわたことの快き。菅木すがきがあるな。いつものやうにじつとひとの目をみつめてゐる。

「こゝをごらんさい。岩に裂け目があるでせう。こゝを温泉が通つて岩を変質させたのです。風化のためにも斯かう云ふ赤い縞しまはできません。けれどもこゝではほかのことから温泉の作用といふことがわかるのです。」

ずるぶん上流まで行つた。實際こ斯んなに川床が平らで水もきれいだし山の中の第一流の道路だ。どこまでものぼりたいのはあたりまへだ。

向ふの岸の方にうつらう。

「先生この岩何す。」千葉だな。お父さんによく似てゐる。「何

に似てます。何でできてますか。」だまつてゐる。「わかりませ
んか。礫^{れき}岩^{がん}です。礫岩^{れきがん}です。凝灰質礫岩。」

及川だな。「いゝですか。これは温泉の作用ですよ。この裂け
目を通つた温泉のために凝灰岩が変質を受けたんです。」

みんなわかるんだな。これは。向ふにも一つ滝があるらしい。

うすぐらい岩の。みんなそこまで行かうと云ふのか。草原があつ
て春木も積んである。ずるぶん^{のぼ}溯つたぞ。こゝは小さな段だ。

「あゝ云ふ岩のすき間のごと何て云ふのだたべな。習つたたと
も。」

「やつぱり裂け目です。裂け目でいゝんです。」習つたといふの
は節理だな。節理なら多面節理、これを節理と云ふわけにはいか

ない。裂罅れつがだ。やっぱり裂け目でいゝんだ。

壺穴つぼあなのいゝのがなくて困るな。少し細長いけれどもこれで説

明しようか。elongated pot-hole 「いゝがどうしてかう掘れるかわかりますか。石ころ、礫いしがこれを掘るのです。そら、水のために礫がごろごろするでせう。だんだん岩を掘るでせう。深いところが一層深くなる筈はずです。もつと大きなものもあります。」

日光の波日光の波、光の網と、水の網。

「ほこの穴こまん円けぢや。先生。」

あゝいゝ、これはいゝ標本だ。こいつなら持つて来いだ。

「さあ、見て下さい。これはいゝ標本です。そら。この中に石ころが入つてませう。みんな円くなつてゐるでせう。水ががりがり擦こす

つたんです。そら。」

実にいゝ礫だ。まっ白だ。まん円だ水でぬれてゐる。取つてしまつた。誰かが又掻き廻す。もうない。あとは茶色だし少し角もある。あゝいゝな。こんなありがたい。

あんまり溯る。もう帰らう。校長もあの路の岐れ目で待つてゐる。

「ほお。戻れ。ほお。」向ふの崖は明るいし声はよく出ない。聞えないやうだ。市野川やぐんぐんのぼつて行く。「ほお、」「戻れど。お。」「戻れ。」

向いた向いた。一人向けばもういゝ。川を戻るよりはこゝからさっきの道へのぼつた方がいゝ、傾斜もゆるく丁度のぼれさうだ。

「みんなそこからあの道へ出る。」

手を振った方がわかるな。わかったわかったわかったやうだ。市の川が崖の上のみちを見てゐる。

うしろの滝の上で誰か叫んでゐる。大竹だ。「おら荷物置いて来たがらこつちがら行く。」よからう。「よおし。」もう大竹が滝をおりて行く。すばやいやつだ。二三人又ついて行く。それから一人おくれてひどく心配さうに背中をかぐめて下りて行く。さいとう齊藤貞一かな。ちよつと一寸こつちを見たところには栗鼠りすの軽さもある。ほんたうに心配なんだ。かあいさう。

市野川やみんながそろそろ崖をみちの方へ上つて行くらしい。さうすればおれはやつぱり川を下つた方がいゝんだ。もしも誰

か途中で止つてゐてはわるい。尤も靴もつとくつした下もポケットに入つてゐるし必ず下らなければならぬといふことはない、けれどもやつぱりこつちを行かう。あゝいゝ氣持だ。鉄槌かなづちを斯こんなに大きく振つて川をあるくことはもう何年ぶりだらう。波が足をあらひ水はつめたく陽ひは射さしてゐる。

「先生あ、ずるぶん足あ早いな。」富手かな、菅木かな、あんなことを云つてゐる。足が早いといふのは道があるくときの話だ。こゝも平らで上等の歩道なのだ。たゞ水があるばかり。

「先生、あの崖がけのどご色變つてゐるのあ何してす。」簡だ。崖の色か。

「あれは向ふだけは土が落ちたんです。滑つて。」

うん。あるある。これが裂罅れつかを温泉の通つた証拠だ。玻璃蛋はりたんぱく白石せきの脈だ。

「こゝをごらん下さい。岩のさけ目に白いものがつまつてゐるでせう。これは温泉から沈澱ちんでんしたのです。石英です。岩のさけ目を白いものが埋めてゐるでせう。いゝ標本です。」みんなが囲む水の中だ。

「取らへないがべが。」「いゝや、此処こここのまんまの標本だ。」
「それでも取らへないがべが。」「取つて見ますか。取れます。」
中々面倒だ。

「先生こつちにもつと大きなのあるんす。」あるある。これならネストと云つてもいゝ。これなら取れる。ハムマアの尖とがつた方で

はだめだ。平たい方は……。

水がぴちやぴちはねる。そっちの方のものが逃げる、ふん。

「水がはねますか。やっぱりこっちでやるかな。」

白く岩に傷がついた。一一ふたところ所ついた。

とれる。とれた。うまい。新鮮だ。青白い。

緑簾石りよくれんせきもついてゐる。さうぢやないこれは苔こけだ。「いゝで

すか。これは玻璃蛋白石です。温泉から沈澱したのです。晶洞も
あります。小さな石英の結晶です。持っておいでなさい。」

誰たれだ崖の上で叫んでゐるのは。

「先生。おら河童捕りかっぱしたもや。河童捕り。」藤原健太郎だ。黒

の制服を着て雑囊ざつなうをさげ、ひどくはしゃいで笑つてゐる。どう

していまごろあんな崖の上などに顔を出したのだ。

「先生。下りで行くべがな。先生。よし、下りで行くぞ。」

「うん。大丈夫。大丈夫だ。」おりるおりる。がりがりやって来るんだな。たゞそのおしまひの一足だけがあぶないぞ。裸の青い岩だし急だ。

「おゝい。もう少し斜におりろ。」おりるおりる。どんどん下りる。もう水へ入った。「どうしたのです。」「先生。河童取りあんすた。ガバンも何も、すっかりぬらすたも。」「どこで……」

もう下らう。滝にきた。下りてゐるものもある。水の流れる所は苔は青く流れない所はかっしよく褐色だ。みんなこはごは下りて来る。水の流れる所は大丈夫滑らないんだ。「水の流れるところをある

きなさい。水の流れるところがいゝんです。」

あれは葛丸くずまる川だ。足をさらはれて淵ふちに入ったのは。いゝや葛

丸川ぢやない。空想のときの暗い谷だ。どっちでもいゝ。水がさあさあ云つてゐる。「いゝな。あそこの水の跳ね返る処よ。」

うん、いゝ、早池峯山はやちねの七折の滝だつてこんなの大きなだけだらう。

もうみんなおりる。おれもおりる。たった一人あとからやつて来る人がある。こはさうだ。

「水の流れるところをあるくんです。水の流れる所を歩くんですよ。」

さうだ。さうだ。いゝ気持ちだ。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十四巻」筑摩書房

1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行

入力：林 幸雄

校正：今井忠夫

2003年4月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

台川

宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>